

論文のタイプ	原著
Author	William G. Mayhan and Glenda M. Sharpe
Title	Chronic exposure to nicotine alters endothelium-dependent arteriolar dilatation: effect of superoxide dismutase
和訳タイトル	慢性のニコチン暴露が血管内皮に関連した細動脈拡張作用に及ぼす影響・超酸化物不均化酵素の作用
Journal	Journal of Applied Physiology
巻	86
号	
ページ	1126-1134
年	1999
キーワード	oxygen radicals(活性酸素), NG-monomethyl-L-arginine(一酸化窒素合成内因性阻害薬), acetylcholine(アセチルコリン), adenosine5' -diphosphate(アデノシン二リン酸)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>[目的]慢性ニコチン暴露による内皮関連細動脈拡張作用への影響を明らかにする。</p> <p>[方法]ハムスターに長期ニコチン投与を行い頬部露出血管での血管拡張性を測定した。</p> <p>[結果]、内皮関連拡張作用物質であるアセチルコリン、アデノシン二リン酸投与による拡張作用は、慢性のニコチン暴露により有意な減少を認めた。一方、内皮非関連拡張作用物質であるニトログリセリン投与による拡張作用は、ニコチン暴露による減少を認めなかった。両群に抗酸化酵素投与を行うと、血管内皮関連拡張作用物質投与群では有意に拡張性改善を認めたが、非血管内皮関連拡張作用物質投与群では変化を認めなかった。また、一酸化窒素合成内因性阻害作用を持つ NG- monomethyl L arginine 投与により、有意に血管内皮関連拡張作用物質による拡張作用の抑制が見られた。</p> <p>[結論]慢性のニコチン暴露では、活性酸素の産生・放出過程における内皮関連血管拡張作用への障害が考えられる。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Rajat S.Barua, John A. ambrose, Lesley-Jane Eales-Reynolds
Title	Dysfunctional Endothelial Nitric Oxide Biosynthesis in Healthy Smokers With Impaired Endothelium-Dependent Vasodilatation
和訳タイトル	健常喫煙者における内皮依存性血管弛緩不全と一酸化窒素生合成障害
Journal	Circulation
巻	
号	104
ページ	1905-1910
年	2001
キーワード	Smoking(喫煙), nitric oxide(一酸化窒素), nitric oxide synthase(一酸化窒素合成), endothelium(血管内皮)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>[目的] 喫煙による内皮依存性血管弛緩不全と一酸化窒素(NO)生合成過程の障害の関与を明らかにする。</p> <p>[方法] 上腕動脈で血流依存性血管拡張反応(EDV)検査を行った男性被検者 23 人</p> <p>[喫煙者 15 人, 非喫煙者 8 人]の血清からヒト臍帯静脈内皮細胞(HUVECs)を用い、一酸化窒素産物、substanceP 刺激一酸化窒素産物、内皮型 NO 合成酵素(eNOS) 蛋白発現及び酵素活性を測定した。</p> <p>[結果] 喫煙者群では、非喫煙者群に比し EDV 低下を認めた。又、喫煙者群では一酸化窒素産物量、刺激一酸化窒素産物量減少及び eNOS 蛋白発現の増加を認めたが、酵素活性に関しては減少を認めた。</p> <p>EDV と刺激一酸化窒素産物、一酸化窒素産物と酵素活性化には正の相関を、一酸化窒素産物と eNOS 蛋白発現には負の相関を認めた。</p> <p>[結論] 喫煙は、一酸化窒素(NO)生合成過程の障害により、内皮依存性血管弛緩不全を引き起こす。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Rajat S. Barua, John A. ambrose, Sudhesh Srivastava
Title	Reactive Oxygen Species Are Involved in Smoking-Induced Dysfunction of Nitric Oxide Biosynthesis and Upregulation of Endothelial Nitric Oxide Synthase: An In Vitro Demonstration in Human Coronary Artery Endothelial Cells
和訳タイトル	ヒト冠動脈血管内皮細胞での喫煙による一酸化窒素合成障害と血管内皮一酸化窒素合成増加過程で生じる酸化物質の関与
Journal	Circulation
巻	
号	107
ページ	2342-2347
年	2003
キーワード	Smoking(喫煙), nitric oxide(一酸化窒素), nitric oxide synthase(一酸化窒素合成), oxidative stress(酸化ストレス)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>[目的]喫煙による冠動脈血管内皮機能障害と一酸化窒素(NO)合成過程の障害の関与を明らかにする。</p> <p>[方法]ヒト正常冠動脈血管内皮細胞(HCAECs)に被検者 25 人[喫煙者 15 人, 非喫煙者 10 人]血清加え、一酸化窒素産物、内皮型 NO 合成酵素(eNOS)蛋白発現及び酵素活性を測定した。また、同検体に PEG-SOD, PEG-SOD+PEG-catalase, Chelerythrine, BH4 を加え処理した後、各々につき再度測定を行った。</p> <p>[結果]喫煙者群では、一酸化窒素産物量、eNOS 活性の減少及び eNOS 蛋白発現の有意な増加が見られ、PEG-SOD, PEG-SOD+PEG-catalase, BH4 処理後、一酸化窒素産物量、eNO 活性の有意な増加を認めた。eNOS 蛋白発現に関しては、PEG-SOD+PEG-catalase 処理群において有意な減少を認めた。</p> <p>[結論]喫煙による冠動脈血管内皮機能障害は、過酸化水素による eNOS 発現調整、フリーラジカルによる eNOS 活性低下を通し一酸化窒素生成障害に起因する。</p>

論文のタイプ	原著
Author	ZHEN LI, VICTOR BARRIOS, JOHN N. BUCHHOLZ,
Title	Chronic Nicotine Administration Does Not Affect Peripheral Vascular Reactivity in the Rat
和訳タイトル	慢性ニコチン暴露によるラット末梢血管機能の影響への非関与
Journal	THE JOURNAL OF PHARMACOLOGY AND EXPERIMENTAL THERAPEUTICS
巻	271
号	8
ページ	1135-1142
年	1994
キーワード	Chronic Nicotine Administration(慢性ニコチン暴露) peripheral vascular(末梢血管) endothelium-dependent vasodilation(内皮依存性血管拡張) vasoconstriction(血管収縮反応)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>[目的]慢性のニコチン暴露が末梢血管反応及び末梢血管神経機能に及ぼす影響を調べる。</p> <p>[方法]日内投与量(0.18~4.7mg/kg/day)のニコチンを14日間投与されたオスのラットの腸間膜動脈灌流標本を用いて、ニコチンによる血管拡張反応、カプサイシン感受性神経刺激及び内皮依存性血管拡張作用を持つアセチルコリン投与による血管拡張反応の測定を行った。また尾動脈標本を用いて、アドレナリン作動性神経刺激及びノルエピネフリン投与による血管収縮反応の測定を行った。さらに、血管作働関連物質(ノルエピネフリン、カルシトニン遺伝子関連ペプチド、ニューロペプチド Y、サブスタンス P)の測定を行った。</p> <p>[結果]最大投与量において14日後の体重増加の有意な抑制が認められたが、血管拡張反応、血管収縮反応及び血管作働物質共にニコチン暴露の有無と相関を認めなかった。</p> <p>[結論]本研究最大投与量までの慢性のニコチン暴露では、血管反応性の変化は認めない。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Thomas Neunteufl, Sandra Heher, Karam Kostner
Title	Contribution of Nicotine to Acute Endothelial Dysfunction in Long-Term Smokers
和訳タイトル	長期喫煙者におけるニコチン摂取と急性内皮障害との関連
Journal	Journal of the American College of Cardiology
巻	39
号	2
ページ	251-256
年	2002
キーワード	Nicotine(ニコチン), Endothelial dysfunction(血管内皮障害), flow-mediated dilatation:FMD(血流依存性血管拡張反応), Long-Term Smokers(長期喫煙者)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>[目的]動物実験では、ニコチン摂取による酸化ストレスが血管内皮拡張障害を引き起こすとの報告があり、人体における、喫煙によるニコチン摂取と急性内皮障害の因果関係を明らかにする。</p> <p>[方法]16 人の健常喫煙者を二重盲検法により経口喫煙者(ニコチン 1mg, タール 12mg)群、経鼻ニコチン(1mg)吸入群にわけ、投与前・20 分後に上腕動脈での血流依存性血管拡張作用(FMD)及びニトログリセリン投与後血管拡張作用(NMD)の評価、酸化反応物質(TBARS, MDA, LPO)、ニコチン濃度の測定を行った。</p> <p>[結果]両群間で血中ニコチン血中濃度に有意差は認められず、投与前後での酸化反応物質に有意差は認めなかった。両群共に NMDでは有意差は認めず、FMDの有意な減少($P < 0.0001$)を認め、経口摂取群では経鼻摂取群に比し約 1.9%の FMD 障害遷延を認めた。</p> <p>[結論]急性内皮障害にはニコチンそのものに起因するが、喫煙によるその他の煙含有物質の関与が示唆される。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Allred EN, Bleecker ER, Chaitman BR, Dahms TE, Gottlieb SO, Hackney JD, Pagano M, Selvester RH, Walden SM, Warren J.
Title	Short-term effect of carbon monoxide exposure on the exercise performance of subjects with coronary artery disease
和訳タイトル	冠動脈疾患患者の運動能に対する一酸化炭素暴露による短期的影響
Journal	N Engl J Med
巻	321
号	21
ページ	1426-1432
年	1989
キーワード	Carboxyhemoglobin, myocardial ischemia 一酸化炭素ヘモグロビン、心筋虚血
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/15/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】一酸化炭素(CO)は、排気ガスと喫煙が主な発生源で、組織虚血を進展させ健康被害を及ぼす。そこで、冠動脈疾患患者の運動中のCO暴露の心筋虚血に対する影響を検討した。【対象・方法】冠動脈疾患患者63例で、症状制限運動負荷試験を室内空気、低あるいは高濃度CO濃度(117±4.4ppm, 253±6.1ppm)を含んだ空気で行った。二重盲検で暴露する順番は無作為に行った。心筋虚血評価は心電図によった。【結果】一酸化炭素濃度は、室内空気、低および高濃度空気それぞれ、0.6, 2.0, 3.9%であった。虚血性ST変化出現時間は、低および高濃度COで、各々5.1%[90%信頼区間1.5-8.7, P=0.02], 12.1%[90%信頼区間, 9.0-15.3, P<0.0001]低下した。狭心症発作誘発時間は、低および高濃度で、各々4.2%[90%信頼区間, 0.7-7.9, P=0.054], 2.0%[90%信頼区間, 3.1-10.9, P=0.004]であった。それぞれに関して用量-反応関係は有意であった。【結語】低用量のCOヘモグロビンは冠動脈疾患患者において運動中の虚血を助長すると結論づけられた。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Shoshana Zevin, Sandra Saunders, Steven G. Gourlay,
Title	Cardiovascular Effects of Carbon Monoxide and Cigarette Smoking
和訳タイトル	喫煙による一酸化炭素吸入が及ぼす心血管系への影響
Journal	Journal of the American College of Cardiology
巻	38
号	6
ページ	1633-1638
年	2001
キーワード	Carbon Monoxide(一酸化炭素)、Cigarette smoking(喫煙)、Cardiovascular effect(心血管系影響)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	2
重要度 (啓蒙的)	2
抄録	<p>[目的]喫煙による一酸化炭素(CO)吸入が及ぼす心血管系への影響を明らかにする。</p> <p>[方法]12人の健常者で、20本/日の喫煙、同喫煙と同濃度(1200~1500ppm)のCO吸入、空気吸入を1週間行い、心拍数、血圧、血小板第4因子、尿中カテコラミン、CRPの測定を行った。</p> <p>[結果]3群間で血圧は有意差を認めなかったものの、喫煙群では他の2群と比し、平均心拍数、血小板第4因子、尿中カテコラミン、CRPの有意な高値を認めた。</p> <p>[結論]:喫煙時と同等の条件のもとに摂取された一酸化炭素は、血圧、心拍数、血漿カテコラミン、血小板凝集及びCRPに有意な効果を示さなかった。本研究で認められた喫煙群での変化はタバコ煙に含まれるCO以外の含有物に起因する事が示唆される。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Lydia A. Bazzano, Jiang He, Paul Muntner,
Title	Relationship between Cigarette Smoking and Novel Risk Factors for Cardiovascular Disease in the United States
和訳タイトル	米国における喫煙と心血管疾患リスク要因との関係
Journal	Annals of Internal Medicine
巻	138
号	11
ページ	891-898
年	2003
キーワード	Cigarette Smoking(喫煙), Cardiovascular disease(心血管疾患), C-reactive protein(C 関連蛋白), fibrinogen(フィブリノゲン), Homocystein(ホモシステイン)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	2
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>[目的]喫煙による心血管疾患発症のリスク評価を、偏在のない大規模集団で生化学的指標を用いて検討する。</p> <p>[方法]1988~1994 年に米国で行われた大規模健康調査(NHANES III)の 18 歳以上の対象者(現喫煙者 4187 名、喫煙経験者 4791 名、非喫煙者 8375 名)で、喫煙状況と心血管疾患発症リスクの評価を、生化学指標(血清 CRP、フィブリノゲン、ホモシステイン)を用いて検討した。</p> <p>[結果]心血管疾患リスク背景を均一化した母集団において、喫煙は 3 指標全ての増加と有意な相関関係を認め、現喫煙者群では、非喫煙者群と比し、同 3 指標の有意な増加を認めた。また、喫煙状況[日毎本数、年毎箱数、累積曝露量(pack-years)血中コチニン濃度]と 3 指標の増加には用量依存性に相関関係が認められた。</p> <p>[結論]喫煙の動脈硬化性疾患の進展にはホモシステイン・炎症の増加が重要な役割を担っている事が示唆される。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Edmund A. Bermudez, Nader Rifai, Julie E. Buring
Title	Relation Between Markers of Systemic Vascular Inflammation and Smoking in Women
和訳タイトル	喫煙女性における組織血管内炎症マーカーと喫煙の関係
Journal	The American Journal of Cardiology
巻	89
号	
ページ	1117-1119
年	2002
キーワード	Systemic vascular inflammation(組織血管内炎症), Smoking(喫煙), Women(女性), Hs-CRP(高感度 CRP),
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>[目的] 健常喫煙女性における喫煙とアテローム血栓症の原因である血管内炎症の関連を明らかにする。</p> <p>[方法] 健常女性の非喫煙者 148 名、現喫煙者 95 名、喫煙経験者 97 名の 3 群間で、血管内炎症マーカーについて比較検討を行った。</p> <p>[結果] 現喫煙者群では、非喫煙者群に比し炎症マーカー (hs-CRP, IL-6, sICAM-1, P-selectin, E-selectin) の有意な増加を認めた。また、3 群間で比較すると、各々のマーカーにおいて非喫煙者群、喫煙経験者群、現喫煙者群間で有意差をもって漸増を認めた。現喫煙者群と非喫煙者群の年齢、BMI、既往症、ホルモン補充療法、LDL・HDL コレステロール値を均一化し施行した多変量解析において hs-CRP, IL-6, sICAM-1, E-selectin は有意差を認めたが、P-selectin は有意差を認めなかった。</p> <p>[結論] 喫煙による血管内炎症は、アテローム血栓症の機序の一因を担っている。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Yi-ping Sun, Bo-qing Zhu, Amanda E. Browne
Title	Nicotine Does Not Influence Arterial Lipid Deposits in Rabbits Exposed to Second-Hand Smoke
和訳タイトル	ウサギモデルでの受動喫煙によるニコチンの動脈脂質沈着への非関与
Journal	Circulation
巻	
号	104
ページ	810-814
年	2001
キーワード	smoking (喫煙), atherosclerosis(アテローム性粥状硬化症), vasodilation(血管拡張)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>[目的]受動喫煙による血管内障害・粥状変化へのニコチンの影響の検討を行う。</p> <p>[方法]摂食制限(0.5%コレステロール食)を行った48匹のウサギを、摂食制限のみのコントロール群(n=24)、通常量のニコチン含有煙を受動喫煙(48本/日,5日/週,10週)群(n=12)、非ニコチン含有煙を受動喫煙(上記)群(n=12)に分け、比較検討した。</p> <p>[結果]ニコチン含有喫煙群では、他の2群に比し、血漿ニコチン、コチニンの有意な増加(P<0.001)を認め、心筋一酸化窒素産物は喫煙2群で有意な減少(P<0.001)を認めた。血清脂質及びアセチルコリンによる血管拡張作用において3群間で有意差は認めず、喫煙2群では、有意に大動脈、肺動脈の脂質沈着(P=0.049, P<0.001)を認めた。</p> <p>[結論]受動喫煙により認めた脂質沈着の著しい増加はニコチン単一の影響では無く、煙含有物の複合的要因が血管内傷害・粥状変化を来す。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Valkonen, M, Kuusi, T.
Title	Passive smoking induces atherogenic changes in low-density lipoprotein.
和訳タイトル	受動喫煙によるLDLにおける動脈硬化性変化
Journal	Circulation
巻	97
号	20
ページ	2012-2016
年	1998
キーワード	passive smoking, atherosclerosis, coronary disease, lipoprotein 受動喫煙、動脈硬化、冠動脈疾患、リポ蛋白
読んだ人	宮武佳子
読んだ期日	2009. 3. 5
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>受動喫煙は冠動脈疾患の重大なリスク因子であるが、その機序は明確ではない。10名の非喫煙者の健常者に1日目は煙のない部屋で、2日目は喫煙者の部屋で30分過ごし、暴露直前と後1.5時間、6時間後に血液採取。受動喫煙で血中の血清中のアスコルビン酸が暴露1.5時間で約3分の1減少 ($P < .001$)、6時間後もその減少は持続した。スルフヒドリル (SH) 群は6時間後に26%減少したが、ビタミンEや retinol などの抗酸化物質に変化なし。抗酸化力の指標であるTRAPは1.5時間後に有意に低下したが6時間後には前値に復した。受動喫煙は脂質濃度に影響は与えなかったが、過酸化脂質を反映するTBARSは1.5時間後、6時間後も有意に増加した ($P < .01$)。培養ヒトマクロファージにおける受動喫煙後のLDLの取り込みは高率だった ($P < .05$)。受動喫煙は血中の抗酸化物質による防御を破壊し、脂質の過酸化、LDLの修飾をもたらし、ヒトマクロファージの取り込みを増加させる。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Masaharu Ishihara, Hikaru Sato, Hironobu Tateishi,
Title	Clinical implications of cigarette smoking in acute myocardial infarction: Acute angiographic findings and long-term prognosis
和訳タイトル	
Journal	American Heart Journal
巻	134
号	5
ページ	955-960
年	1997
キーワード	Cigarette smoking(喫煙), Acute myocardial infarction(急性心筋梗塞), angiography(血管造影検査), Thrombolysis in Myocardial Infarction(TIMI)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	2
重要度 (啓蒙的)	2
抄録	<p>[目的]喫煙者の急性心筋梗塞発症後、血栓溶解療法における再還流及び長期予後を検討する。</p> <p>[方法]発症24時間以内に冠動脈造影術後血栓溶解療法を施行した前壁梗塞患者260名を、喫煙者群(158名)と非喫煙者群(102名)にわけ比較検討した。</p> <p>[結果]喫煙者群では、男性、若年者、単枝病変が多く、治療前冠動脈造影では再疎通開存度(TIMI grade)は非喫煙者群と有意差は認めなかったが、血栓溶解療法後の完全再疎通開存例(TIMI grade3)は有意に高い($P=0.004$)傾向を示した。予後に関しては、喫煙者群は非喫煙者群と比し、院内死亡率の低下($P=0.022$)及び5年生存率の上昇($P=0.022$)に有意差を認めた。</p> <p>[結論]喫煙者の急性心筋梗塞後の予後改善は血栓溶解療法に対する良好なコンプライアンスに起因すると考えられ、5年間の長期予後の改善が実証された。</p>

論文のタイプ	原著
Author	SHMUEL GOTTLIEB, VALENTINA BOYKO, DORON ZAHGER
Title	Smoking and Prognosis After Acute Myocardial Infarction in the Thrombolytic Era (Israeli Thrombolytic National Survey)
和訳タイトル	喫煙と急性心筋梗塞後の血栓溶解療法の幕開けによる予後 (イスラエル国内血栓溶解療法調査)
Journal	Journal of American College of Cardiology
巻	28
号	6
ページ	1506-1513
年	1996
キーワード	Smoking(喫煙), Prognosis(予後), Acute Myocardial Infarction(急性心筋梗塞), Thrombolysis(血栓溶解療法), Israeli(イスラエル)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	2
重要度 (啓蒙的)	2
抄録	<p>[目的]喫煙による急性心筋梗塞後の予後への影響</p> <p>[方法]1994年1~2月イスラエル国内の全循環器施設に急性心筋梗塞で入院した367名の喫煙者(現喫煙者+1ヶ月以内の喫煙者)と632名の非喫煙者(未喫煙者+1ヶ月以上の禁煙者)の背景、治療、予後について比較検討を行った。</p> <p>[結果]喫煙者群では、非喫煙者群に比し、性別(男性)、年齢(平均10歳若年)、家族歴、梗塞部位(下壁)、心不全合併率、アスピリン内服治療及び血栓溶解療法による治療率に高い有意差を、心筋梗塞・狭心症・高血圧・糖尿病の既往に関しては低い有意差を認めた。予後に関しては、喫煙群で、30日後・6ヶ月後死亡率の有意な低下を認めた。しかしながら、両群の背景、年齢、治療を均一化させた</p> <p>後の解析では、両群間に差は認めなかった。</p> <p>[結論]喫煙による急性心筋梗塞後の予後は年齢、リスクファクター有無に起因し、喫煙が予後改善をもたらすものではない。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Manuel Ruiz-Bailén, Eduardo Aguayo de Hoyos, Antonio Reina-Toral
Title	Paradoxical Effect of Smoking in the Spanish Population With Acute Myocardial Infarction or Unstable Angina
和訳タイトル	スペインにけるタバコの急性心筋梗塞及び不安定狭心症への逆説的影響
Journal	CHEST
巻	125
号	3
ページ	831-840
年	2004
キーワード	Acute myocardial infarction(急性心筋梗塞)、cigarette smoking(喫煙)、mortality(死亡率)、tobacco(タバコ)、unstable angina(不安定狭心症)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	2
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>[目的]急性心筋梗塞(AMI)及び不安定狭心症(UA)患者での喫煙における死亡率改善効果の検討</p> <p>[方法]1995～2001年スペイン国内119施設に収容された急性冠症候群患者29532名の後ろ向きコホート研究</p> <p>[結果]AMI患者(17761名)中、喫煙者(32.6%)は非喫煙者(47.7%)3ヶ月以上の禁煙者(19.7%)と比し、有意に年齢、梗塞領域、合併症、重症度、糖尿病・高血圧の既往及び集中治療室内死亡率の減少を認め、多変量解析においても喫煙が独立起因因子として有意差を認めた。一方UA患者(7795名)中、喫煙者(52.9%)は有意に年齢、糖尿病・高血圧・高脂血症・脳梗塞の既往、重症度が低く、異型狭心症・複雑再還流手技の有意な増加を認めた。死亡率は低い傾向にあるものの、多変量解析にて明らかな有意差を認めなかった。</p> <p>[結論]喫煙はAMI患者での死亡率改善に直接的要因となっているが、UA患者では、他の要因の関与が示唆される。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Giora Weisz, David A. Cox, Eulogio Garcia
Title	Impact of smoking status on outcomes of primary coronary intervention for acute myocardial infarction-The smoker's paradox revisited
和訳タイトル	急性心筋梗塞に対する初期冠動脈治療成果と喫煙との関係-喫煙者パラドックスの再考
Journal	American Heart Journal
巻	150
号	2
ページ	358-364
年	2005
キーワード	smoking(喫煙), primary coronary intervention(初期冠動脈治療), acute myocardial infarction(急性心筋梗塞), smoker's paradox(喫煙者パラドックス)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>[目的] 急性心筋梗塞(AMI)後の再灌流療法成績と喫煙の関係について検討する。</p> <p>[方法] 2082人のAMI患者[非喫煙者638人, 喫煙経験者546人, 現喫煙者898人]を無作為にPTCA±GPⅡb/Ⅲa阻害薬(アブシキシマブ)群、ステント±アブシキシマブ群の4群に割り付け、治療後1年間のフォローアップを行った。</p> <p>[結果] 喫煙者群は非喫煙者群と比し、年齢、女子比率、糖尿病・高血圧・心筋梗塞既往、3枝病変が低率であった。手技の成功率と喫煙状況に相関は認めず、一ヶ月・一年後の死亡率は共に、現喫煙者群、喫煙経験者群、非喫煙者群間で有意に漸増を認めた。しかし、疾患背景の補正により喫煙の有無と死亡率に相関関係は認めなかった。</p> <p>[結論] 喫煙者における冠動脈形成術後の高生存率は、喫煙によるもので無く、疾患背景の違いに起因しており、喫煙は独立した予後改善因子では無い。</p>

論文のタイプ	原著
Author	David J. Cohen, Michel Doucet, Donald E. Cutlip
Title	Impact of Smoking on Clinical and Angiographic Restenosis After Percutaneous Coronary Intervention: Another Smoker's Paradox?
和訳タイトル	冠動脈形成術後の臨床的・血管造影学的再狭窄に対する喫煙の影響：もう一つの喫煙によるパラドックス
Journal	Circulation
巻	
号	104
ページ	773-778
年	2001
キーワード	Smoking(喫煙), Restenosis(再狭窄), Percutaneous Coronary Intervention(冠動脈形成術)
読んだ人	中田 淳
読んだ期日	2/20/2009
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>[目的]喫煙者は非喫煙者と比し、冠動脈形成術(PCI)後の標的病変部再血行再建(TLR)が必要となる頻度が低いとの報告がある。本研究では喫煙による冠動脈再狭窄の因果関係を、臨床的及び血管造影学的検討を行い明らかにする。</p> <p>[方法]PCI後の患者8671名を、臨床的フォローのみを行った5682名と定期的血管造影フォローを行った2989名の2群に分け、再狭窄について比較検討した。</p> <p>[結果]臨床的フォロー群の中で、喫煙者は非煙者(未喫煙者+一年以内の禁煙者)と比しTLR施行の割合が有意に低く、臨床的背景と造影学的背景補正後の解析に於いても、有意差をもって低値を認めた。血管造影学的フォロー群では、喫煙による再狭窄に有意差は認めなかったが、中等度(50~69%)再狭窄を認めた患者では喫煙者は非喫煙者と比し狭心痛の自覚が有意に低い傾向を示した。</p> <p>[結論]喫煙者の両群における再狭窄発現頻度の違いは、喫煙者の症状感受性の低下及び症状発現後の低受診加療率に起因すると考えられ、より厳密なフォローの必要性が示唆される。</p>

論文のタイプ	原著
Author	D. A. Barzilai;M. A. Goodwin;S. J. Zyzanski;K. C. Stange
Title	Does health habit counseling affect patient satisfaction?
和訳タイトル	健康習慣を変容させるカウンセリングは患者満足度に影響するか？
Journal	Prev Med
巻	33
号	6
ページ	595-9
年	2001
キーワード	生活習慣、行動変容、禁煙、開業医、患者満足度
読んだ人	木田 厚瑞
読んだ期日	平成 21 年 3 月 11 日
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	<p>健康に関連する生活習慣に関する助言は基本的には病気の発症による社会的負荷を予防するが患者がこれを受け入れてくれるかどうかについては不明である。本研究では外来受診において生活習慣に関する行動変容を医師が助言すると患者の満足度が低下するかどうかを検討した。米国、オハイオにおける 138 人の地域開業医を受診した 2,459 人の成人について調査。患者満足度は MOS 9 項目版を使用。助言内容は食事、運動、アルコール摂取、薬物使用、性感染、HIV 予防などであった。喫煙患者が医師から禁煙を助言されたときの患者満足度が高いことが判明した。結論として地域開業医が患者と行動変容について討論することは患者の満足度を低下させるものではない。特に禁煙に関する助言の満足度は極めて高い。</p>

論文のタイプ	原著
Author	N. A. Christakis; J. H. Fowler
Title	The collective dynamics of smoking in a large social network
和訳タイトル	大規模社会ネットワークにおける喫煙習慣の集合的な行動力学
Journal	N Engl J Med
巻	358
号	21
ページ	2249-58
年	2008
キーワード	禁煙運動、社会的拡散、集団、
読んだ人	木田 厚瑞
読んだ期日	平成 21 年 3 月 11 日
重要度 (アカデミック)	5
重要度 (啓蒙的)	5
抄録	<p>過去 30 年間に米国の喫煙率は著しく低下した。筆者らは人から人へと喫煙習慣が拡散し、またどのグループが共に最も禁煙に至るかを検討した。Framingham Heart Study の一環として 1971 から 2003 までに計 12,067 人を反復して調査。network 解析法を用いた。ネットワーク内に明らかに喫煙者、非喫煙者と分類される群が存在した。これらの群は 3 群に分類できた。全体集団として喫煙者は減少していたが年代を越えて喫煙者群のサイズは保たれていた。このことは全体がある調和を保ちながら禁煙していることを示唆する。喫煙者は社会的なネットワークからみると、次第に周辺部に位置するようになる。配偶者によって禁煙に至る個人の機会は 6.7% (95% CI は 5.9-7.3)、これに対し兄弟では 2.5% (95% CI は 1.4-3.5)、友人は 3.6% (95% CI, 1.2-5.5)、小さな農場では同僚による場合は 3.4% (95% CI, 0.5-5.6)、より教育レベルが高い友人の方が低い友人よりも影響力が大きかった。しかしこのような効果はすぐ近傍に働く隣人においては認められなかった。結論として禁煙はネットワーク的に広がる性質がある。喫煙行動は社会的な繋がりが強さを経て広がる性質があり喫煙中止をした人が繋ぎ目となり喫煙者は次第に社会的に隅に寄せられるようになっていく。社会における禁煙運動を広める際にこのことは参考となる。</p>

論文のタイプ	原著
Author	R. Doll;R. Peto;J. Boreham;I. Sutherland
Title	Mortality in relation to smoking: 50 years' observations on male British doctors
和訳タイトル	喫煙による死亡率の変遷：英国における男性医師 50 年間の観察
Journal	Bmj
巻	328
号	7455
ページ	1519
年	2004
キーワード	喫煙による死亡、英国、医師、長期観察、疫学
読んだ人	木田 厚瑞
読んだ期日	平成 21 年 3 月 11 日
重要度 (アカデミック)	5
重要度 (啓蒙的)	5
抄録	<p>異なる時代における喫煙の被害を比較するため男性喫煙者間で比較、さらに異なる年齢で禁煙したときのリスク軽減につき検討した。英国、男性医師 34,439 人が対象。1951 年から 2001 年にいたる前向き研究として実施、登録後定期的に調査を実施。異なる時代における死亡率を比較した。喫煙による過剰死亡の主原因は血管病変、腫瘍、呼吸器疾患であった 1900-1930 年に生まれ紙巻たばこだけを吸っていた人は生涯にわたり喫煙歴がない人よりも約 10 年間寿命の短縮があった。禁煙を 60, 50, 40, 30 の各年齢で実施すると寿命延長はそれぞれ 3, 6, 9, 10 年間の効果がみられた。喫煙の影響は 19 世紀に生まれた人では過剰死亡に対する影響は少なく、1920 年代に生まれた人で最大であった。中年(35-69 歳)で死亡した確率は 1900-1909 うまれの喫煙者対非喫煙者では 42% 対 24% (約 2 倍の差異) であったが 1920 年代では 43% 対 15% (約 3 倍の差異) であった。高齢者では 1950 年代に 70-90 歳であった喫煙者対非喫煙者 (すなわち 1870 年代に生まれた男性) を比較した生存の確率は 10% 対 12% であった。しかし 1910 年代に生まれた人の 1990 年代の死亡率の比較では 7% 対 33% であった。結論として過去半世紀に非喫煙者の寿命は医療内容の向上があり飛躍的に延長している。他方、喫煙者群の比較では早期の喫煙開始、より重喫煙者と非喫煙者の死亡率の差異は大きくなっている。1920 年</p>

<p>ごろに生まれた喫煙者における中年期の死亡率は 3 倍に達していた。しかし 50 歳で禁煙すると危険度は半分に 30 歳での禁煙では喫煙が寿命短縮となる影響は回避できる。</p>
